

## 卓球授業の一実践

— スポーツ文化の主体的な継承のための構想力を得ることを目指して —

神戸大学発達科学部 秋元 忍\*

### A Practice of Table Tennis Class: Toward the Development of Imaginative Faculty for Future of Sport Culture

Shinobu AKIMOTO

*Faculty of Human Development, Kobe University*

キーワード：スポーツ実習，現代史，卓球

Key Words : Sports Practice, Contemporary History, Table Tennis

#### 1. はじめに

##### 1. 1. 研究の目的・意義

本稿の目的は、大学におけるスポーツ実践<sup>註1)</sup>の現代史を、筆者が担当した卓球授業を事例として素描することである。具体的には、この卓球授業がいかに展開されたのかを再構成することから、大学におけるスポーツ実践の現在の側面を照射し、その今後のありようの展望に資することを志向するものである。

本稿の動機となったのは、大学におけるスポーツ実践の必要性に対する疑問である。この疑問は次の2つの観点から導かれた。

1点目は、体育・スポーツ史研究の知見から提起される疑問である。近代日本の大学の場合、体育が必修化されたのは、国がその必要性を認めた時のみであった。今日、必修教科としての大学体育の危機が叫ばれているということは、その必要性がほとんど認められなくなったことを示唆しているように思われる。「戦前の軍事予備教育、あるいは戦後の民主主義教育への貢献に匹敵する程の必要性、換言すれば国の側からの期待」<sup>2)</sup>とは、一体何であろうか。また、地域を日本に限らずとも、遊び、気晴らしであったスポーツが教育の場に取りこまれ、その手段となったのは、そもそも近代社会に固有の出来事にすぎない。大学の中で行われるという状

況は、普遍的なスポーツとの関わり方ではない。

2点目は、大学におけるスポーツ実習科目担当者としての経験から浮かんでくる疑問である。スポーツ実習科目ではスポーツに見出された教育的価値が教授される。その価値とは、健康の維持および増進、身体への気付き、コミュニケーション・スキルの向上などと主張されるものである。しかしこのことは、肯定的な面のみならず、本来教育とは異なる文化であるはずの、スポーツの本質的理解を困難にしている面もあるように思われる。大学という教育機関で実践される限り、スポーツは教育の手段の域を出ない。筆者が担当してきたスポーツ実習科目の受講者の感想には、「スポーツとは楽しむものだ」という意味の言説がしばしば見出されるが、教育目標達成のためのスポーツの手段化に潜む矛盾は、受講者にも自覚されているのではないか。

では、大学におけるスポーツ実践、中でも授業としてのスポーツ実習科目は何を目指すべきなのか。周知のように、この問いは決して新しいものではない。これまでにも、大学体育、あるいはスポーツ実習科目に関する教育研究については多くの成果が蓄積され、現場に還元されてきた。これらの成果に対し、本研究は理想的授業モデルの提示を目指すものではない。しかし、その存在理由が問われる中で、いかにスポーツ実

\*旧所属：九州大学大学教育研究センター

習科目が教授されたのかを記録していく作業は、今後の大学におけるスポーツ実践のあり方を考える際の1つの材料を提示するだろう。将来の展望は、過去の批判的検討によって拓かれるからである。また本稿は、歴史研究者としての、乖離しがちな授業と研究の融合化の1つの試みでもある。

### 1. 2. 研究の課題と対象

上記の目的を達成するため、本稿では、筆者が担当したある卓球授業の試みを、以下の4つの観点から再構成することを課題とした。1) 授業目的はいかに設定されたのか、2) 授業はいかに展開されたのか、3) 受講者はいかに対応したのか、4) 受講者はこの卓球授業をいかなる実践としてイメージしたのか。最後に、大学におけるスポーツ実践の必要性という観点から、歴史的事実としてのこの実践を評価した。

本稿で事例として取り上げたのは、九州大学全学教育「健康・スポーツ科学科目Ⅱ」の1領域である「身体運動実習Ⅱ」の「卓球」である。2002年度前期に開講され、受講者数は38名（男性24名、女性14名）であった。実施場所は九州大学六本松地区体育館であり、一度に15台の卓球台が利用可能であった。

## 2. 卓球授業の再構成

### 2. 1. 授業目的の設定

九州大学全学教育科目には「健康・スポーツ科学科目Ⅰ」と「健康・スポーツ科学科目Ⅱ」が開講されている。Ⅰ、Ⅱともに実習、講義からなっており、前者は必修、後者は1年次後期からの選択科目である。「健康・スポーツ科学科目Ⅱ」の目的は、「様々な身体運動やスポーツを継続的に実施することの意義について学び、『身体運動の生活化』を図っていくこと」<sup>1)</sup>とされている。

健康・スポーツ科学科目Ⅱの各授業は、全体の目的に適合的な、個別の目的を設定することになる。筆者はこのすり合わせを以下のように進めた。受講者が大学卒業後スポーツといかに関わっていくかを主体的に考えていくためには、そもそもスポーツとはいかなる文化なのか、という深い理解が不可欠である。そしてそのためには、単に消費の対象としてではなく、一度自分たちのものとしてスポーツを取り戻す必要があるのではないか。こうした体験によって、いわゆる近代スポーツの歴史的位置を理解し、スポーツ文化の主体的な継承のための構想力を得ることができるのではないか。

以上を踏まえ、筆者はこの授業の目的を「スポーツの歴史被拘束性を実践の中から理解し、その主体的な

継承のための構想力を育むこと」とした。

身体運動の生活化を目指すという健康・スポーツ科学科目Ⅱの目的は、大学におけるスポーツ実践の必要性をめぐる議論の歴史の、1つの表象であろう。同時に、授業担当者である筆者は、その歴史の中に現在生きている。授業はこうあるべきだという考え方は筆者の主観だが、その主観は不可避免的に歴史に規定される。このような二重の拘束性の中で、授業目的の設定は行われた。

### 2. 2. 授業の展開

この個別の授業目的を達成するため、授業の展開は以下の表1のように設定された。全体の構成は、6時間目までの前半部と、それ以降の後半部からなっている。

表1 授業の展開

時間	テーマ
1時間目	履修のガイダンス 卓球の歴史
2時間目	ボールに慣れる
3時間目	コースを打ち分ける（ロング、ショート）
4時間目	回転をかける（ドライブ、スライス、サイドスピン）
5時間目	様々なストロークをマスターする
6時間目	シングルス、ダブルスのルールを理解する
7時間目以降	「卓球を楽しむためのプログラム」の計画と実施

前半部は、近代スポーツとしての卓球を体感することを意図した。卓球の基本的な技術を習得し、競技としての卓球の技術がいかに体系化され、ルールが整備されているかを、上記のテーマごとに学ぶ。卓球、そして卓球を含む近代スポーツの歴史にも言及しながら、既知のスポーツとしての卓球が、いかなる歴史的位置にあるのかを学習できるよう促した。

後半部は、クラスを5つの班に分け、班ごとに「卓球を楽しむためのプログラムの作成」に取り組んだ。従来のスポーツのあり方にこだわらず、実際にスポーツ実践の場を創造することによって、スポーツへの主体的なかわり方を考えていくための構想力を得ることをねらいとした。

7時間目以降の、受講者による「卓球を楽しむためのプログラム」の計画と実施は、次のように進められた。

- 1) 1回75分のプログラムを班ごとに作成、実行する。プログラムの受講者は、担当班のメンバー以外の受講者とする。ただし、担当班のメンバーがプログラムに参加してもよい。
- 2) 終了後、受講者全員からその内容を評価してもらう。各班で評価を受けるためのアンケート表を作成

身体運動実習Ⅱ (卓球)

担当教員: 秋元 忍

(大教センター講師)

研究室 保健体育教育室(本館1階)

In

E-mail

テーマ: 卓球を楽しむプログラムの作成と実行

Plan (計画) → Do (実行) → See (評価) → Feedback (改善: 期末レポート)

1. 5グループに分かれ、一回75分のプログラムを作成、実行する。
2. 終了後、受講者全員からその内容を評価してもらう。→アンケート表の作成
3. 貢献度をもとに、グループ内でもメンバー相互の評価を行う。→評価表の作成
4. 受講者のアンケートの集計、分析をもとに、学期末レポート提出

評価の方法

出席: 60点 (5点×12回)

グループ内評価: 20点

レポート: 20点

受講者データ 人数: 38名 (男24人、女14人)

・実施当日の仕事の流れ

- ①遅くとも開始15分前には卓球場に到着
- ②グループで最終打ち合わせ
- ③会場準備、用具、資料等のチェック
- ④開講あいさつ: さわやかに、笑顔で自己(グループ)紹介
- ⑤プログラム内容のテーマ説明
- ⑥準備運動・ウォーミングアップ
- ⑦必要に応じてグループビンゴ
- ⑧プログラム実施 (説明→デモ→質疑応答→グループビンゴ→実施→結果発表)
- ⑨まとめ、受講者アンケート実施、回収
- ⑩閉講あいさつ、受講生解散
- ⑪グループでまとめのミーティング (アンケート集計、グループ内評価の方法)

・最終授業日までの流れ

- ⑫アンケートの集計結果のまとめ
- ⑬グループ内評価の実施と点数化 (各グループ毎に評価表を提出)
- ⑭アンケートの集計結果のグラフを各自添付の上、レポート提出 (2000字程度)

・プログラム評価 (アンケート) の主な観点

プログラムの内容について/担当者について/記述式質問、等

図1 実施当日の作業の流れ, 授業終了日までの作業の流れ

する。

- 3) 残りの15分を使い、筆者と班のメンバーで事後ミーティングを行う。
- 4) 貢献度を基準に、班内でもメンバー相互の評価を行う。適切な評価を行うための評価表を、各班で作成する。この評価は20点満点とし、成績に反映させる。評価の項目は各グループで作成する。
- 5) 受講者のアンケートの集計、分析をもとに、学期末レポートを作成する。この検討の結果を、次のより良い実践へとフィードバックする。

プログラム作成のための説明の際には、必ずしもこれまでの卓球という枠にとらわれる必要はないことを強調し、独自の実践の場の創造を促した。

説明のために以下の事項を記載した資料を配布した。それらは、実施当日の作業の流れ、授業終了日までの作業の流れ (図1)、グループメンバーリスト、プログラム記入表、グループ内評価表ひな型、アンケート用紙ひな型、アンケート作成のための参考資料 (大学の授業評価表) であった。

その後、8~13時間目までの5時間を、1班から5班の順で、プログラム実践の時間とした。実践の当日には遅くとも授業開始15分前には集合し、筆者と事前

プログラムの キャッチコピー	穴に落ちるな! 四角です! ③	
プログラムの趣旨	卓球の新しい形を提案。 みんな楽しんで!!	
内容	時間配分	ポイント
1. あいさつ	1	やさしく、笑顔で自己紹介
2. ラジオ体操	10 (60)	みんなの声に合わせよう!
3. グループ分け	2	8人程度のグループ
4. ルール説明と ① 説明コーナー	10	4つの卓球台をくっつけていこう!
5. 練習	10	卓球の穴にはボールは落ちない! 卓球のルールを守って練習しよう!
6. ゲームSTART	15	点数をつけよう! 卓球とゲームを同時に楽しもう!
7. 決勝戦	15	ゲームは2人ずつ、卓球は2人ずつ
8. 打ち上げ アンケート	10	みんなの感想を聞こう!
9. アンケート回収	1	15分間にアンケートを回収しよう!
10. あいさつ	1	

図2 1班のプログラム記入表

1 班

アンケート用紙

本日はプログラムへのご参加ありがとうございます。次のアンケートにご記入願います。

男 女

はじめに

卓球経験者ですか? はい・いいえ

授業について

	非常に良い	良い	ふつう	やや不良	非常に不良
1. キャッチコピーはどうか?	5	4	3	2	1
2. ラジオ体操を取り入れたことについて、どうか?	5	4	3	2	1
3. ルールはきちんと理解できましたか?	5	4	3	2	1
4. このルールの新鮮度は?	5	4	3	2	1
5. 音楽をかけたというアイデアはどうか?	5	4	3	2	1

1 班

アンケートの続き

担当者について

	非常に良い	良い	ふつう	やや不良	非常に不良
1. 分かりやすく、スムーズな進行ができていましたか?	5	4	3	2	1
2. 笑顔で対応できていましたか?	5	4	3	2	1

全体を通して

	5	4	3	2	1
1. 今日は楽しめましたか?	5	4	3	2	1
2. 運動しながら聞きたい音楽はありますか?					
3. 改善すべきと思う点があれば書いて下さい。					

ご協力ありがとうございました。

図3 1班のアンケート表

ミーティングを行い、完成したプログラム記入表のコピーを提出させた。

計画に従い、各班はプログラムを実行した。そして終了後直ちに評価を受けた。図2は1班のプログラム記入表、図3は1班のアンケート表である。図4、図5は3班男性のアンケート集計結果、グループ内評価表である。受講者が作成したこれらの図は、プログラムが実行されたことのある証左である。

### 2. 3. 受講者の対応

提出されたレポートやプログラム実施表等を史料としながら、前半部と後半部に分けて、受講者がいかにこの授業に対応したのを見ていく。

#### 1) 6時間目までの前半部

受講者にとって、スポーツの技術を体系的に習得し、同時に正式とされるルールを学んでいくという構成は、目新しいものではないだろう。「前半の講義は経験者にとっては余裕のある内容だったが、友達にコツを教えてあげたりして、楽しむことができた。」(2年・男性) 技術の向上に伴う喜び、ゲームの楽しさに言及した受講者は多かった。「実は、何となく卓球を選んだのだが、実際授業を受けてみて、今まで知らなかったうち方を学び、やっていくうちに速いラリーができるようになったりと、技術面はかなり上がったように思う。」(2年・男性)「正直退屈なときもありましたが、いろんな強さの人と卓球ができ、結構刺激を受けたし、

自分のレベルはまだこんなものかと気付かされました。」(2年・男性)

ただし、技術が体系化され、ルールが統一化されていることの意味についてまで、前半部の段階で思い至ることは少なかったようだ。卓球の歴史や、いわゆる近代スポーツの成立過程については1時間目に触れた。だが、前半部の実践を、スポーツの歴史被拘束性の理解へとより強く結び付けたのは、後述するように後半部の実践であった。

#### 2) 7時間目以降の後半部

計5つの班に分かれた受講者は、7時間目からプログラムの作成を開始した。まず自己紹介を兼ねて、グループメンバー表を作成した。その後、班内でアイデアを出し合いながら、プログラム記入表に計画を具体化していった。この7時間目の授業時間内のみでは計画をまとめることは困難であるため、多くの班が授業時間外にも話し合う機会を持った。

各班が作成したプログラムのキャッチコピー、趣旨、概要は表2の通りであった。キャッチコピーは、趣旨をわかりやすく伝えるために実施当日の黒板に大きく板書されるものである。実施しようとする内容と、そのコピー、趣旨とが合致していない案も見られたが、あくまで班のメンバーの話し合いの結果に委ね、事後ミーティングまで指摘しなかった。

計画段階の各班の対応は以下のように語られていた。



<アンケート集計結果>

回答者数23名（男性10名、女性13名）

1. 回答項目（5点満点で採点。）

- プログラムは楽しめたか。
- プログラム、ルールの説明はわかりやすかったか。
- プログラムの進行はスムーズであったか。
- プログラムに興味、関心が持てたか。
- プログラム実行員の声は聞き取りやすかったか。

2. 集計結果

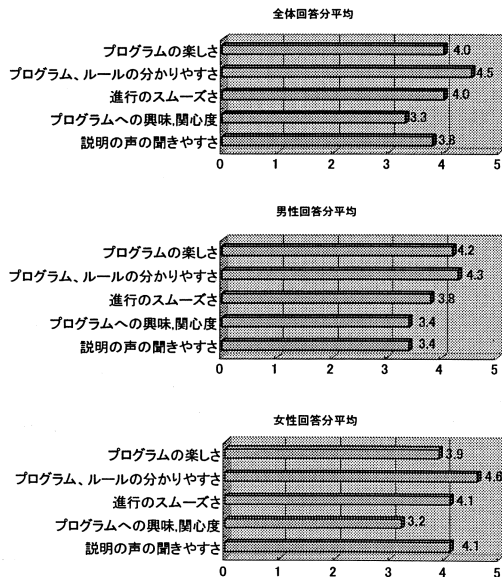


図4 3班男性のアンケート集計結果

3班

グループ内評価表

名前	
1. 協調性	4/5
2. 積極的発言力	5/5
3. 行動力	5/4
4. マナー(情熱)	4/5
評点	18 / 20点

図5 3班男性のグループ内評価表

表2 プログラムのコピー、趣旨、概要

	1班	2班	3班	4班	5班
コピー	穴に落ちるな！ 四角でボン	弱肉強食	Let's Ping-Pong	ピンポンダッシュ	走る卓球—カヴァー
趣旨	卓球の新しい形を提案 みんなで楽しもう！	バトル	経験者から未経験者までが飽きずに楽しめるようにする	楽しくコントロールを身につける	経験の差をなくして思いっきり楽しむことは可能か？
概要	卓球台を4つ組み合わせ、中心に穴を作り、そこにボールが落ちないようにするゲーム。ネットは張らない。卓球自体のルールは通常のゲームと同じ。ミスをすれば、その台に打ってきた人の得点とする。経験者、非経験者の差をなくすことがねらい。	ダブルスのアップダウンゲームを行う。何度か順位の交換が続いた後に、台ごとにシングルの総当たり戦を行う。通常の卓球で、同じ程度のレベルの人と真剣に卓球を楽しめるようにすることがねらい。	通常の卓球のルールで、ストローク別の技術練習の後、トーナメント方式のゲームを行う。1～6回目までの授業で習得した技術を活用しながら、真剣勝負の中で仲間と触れ合うことがねらい。	ネットを外し、台の間隔を離れた状態でダブルスのゲームを行う。21点制で行い、ルールは通常の卓球と同じ。台が遠いために生じる、通常の卓球とは異なるラリーの感覚を楽しむことがねらい。	卓球台を4台、横につなげる。通常のネットの代わりに、卓球場内に置かれている仕切りネット（通常のネットの2倍程度の高さになる）を置く。3対3でゲームを行う。一度ボールを打った人は連続して打ち返すことができない。ネットも高いため、経験者でもスマッシュを決めることは難しい。そのために生じる、広い台を走り回るという通常の卓球では味わえない感覚を楽しむことがねらい。

「内容については様々な案が出た。そのなかでも、とりわけ斬新なアイデアを実行しようとした。そこで、卓球台を4つ用い、中心で四角形をつくるように並べるといふ、卓球台の並べ方そのものを変えてしまうというゲームにチャレンジした。これは、なかなかいいアイデアだったと思う。」（1班・2年・女性）

「前半の講義で気付いたことや、女の子ならではの、男の人は強すぎて怖い等といった意見を出し合い、僕らのプログラムは試合を中心としたものとし、みんなが卓球の試合をだいたい同じレベルの人とできるように工夫した。」（2班・2年・男性）

「オリンピックの種目にもなっているスポーツであるのだから、洗練された形が今の卓球である。それを少し考えただけでよりよいものに簡単にルールを変えられるわけがない。そう思った。…私は現状のルールでやることを望んだ。」（3班・2年・男性）

「このプログラム作成にあたってはかなり悩みました。…どうしても飽きずにできるものを見ると、奇抜すぎてかえってよくないという意見になって、なるべくシンプルにという方向に向かいました。」

（4班・2年・男性）

「私たちの班は、わりと初対面の人が多かったのですが、アイディアは次から次へと出ました。…結局、…台を2つ3つとくっつけて、うんと大きな台で3対3でやるとおもしろいのではないか、ということで、この案で固めていくことに決めました。」

（5班・2年・男性）

5つの班のうち、3つの班が通常の卓球台の置き方を変更したゲームを提案した。2つの班は、通常の卓球のままの楽しみ方を志向した。いずれにせよ、「まったく初めての経験」（2年・女性）であったと述べた受講者もいたように、プログラムを作成する作業は、受け身ではなく主体的な関与を受講者に要請し、スポーツ実践の場の創造について深く考える機会を提供したと思われる。

#### 2. 4. 受講者の授業に対するイメージ

受講者のレポートに見られる言説はイメージであり、実態ではない。しかしながら、この授業が受講者にいかなるイメージを想起したのかを見ることは、授業の価値を検討するための手がかりとなるだろう。

前半に、既知のゲームとしての卓球の技術、ルールを学び、後半にはそれにとらわれることなく実践の場を創造するという試みは、これまでほとんど体験したことがないということもあり、違和感を訴える受講者もいた。

「変則的なルールで卓球をやることには、私個人は反対である。というのも、私としてはただひたすら卓球をやりたいくてこの授業を受講したわけで…変則的なルールやプログラムの企画は予想だにしていなかったものである。」（2年・男性）

しかし、授業の目的は1時間目に説明済みであり、その趣旨を理解した受講者には、おおむね好意的に捉えられていた。

「普通に運動するだけの授業ではなくて非常におもしろい授業だと思いました。グループがあり、話し合いや卓球を通して、楽しい交流がもてました。」

（2年・男性）

「こういった形の授業をしたのは初めてだったが、とても良かった。普通のスポーツがぐっと楽しめたので、もしこれからスポーツをすることがあれば是非生かしたいし、スポーツとは関係ないところでも今回の経験は生きてくると思った。」（2年・女性）

「前半は基本的に基礎だったので面白いと感じることもなかった。しかし、後半は明らかに違った。一風変わった卓球にのめりこんだのを覚えている。」

（2年・男性）

「中学・高校と部活でやっていたけど、部活とは違う楽しさがあった。部活では本当にレギュラー争いが激しかったのでみんなピリピリしていてかなり緊迫した雰囲気の中でしか卓球をしたことがなかったけど、みんなで楽しくやるのも結構いいもんだと思った。」

（2年・男性）

「卓球というスポーツを本格的に行ったのは私にとって、今回が初めてでした。その上に自分達で授業を作っていくという経験も初めての経験でした。両方とも大変素晴らしい経験でした。」（2年・女性）

むしろ、「13回の講義も終わり、自分の卓球の技術も上がったと思いますが、今回の身体運動実習はスポーツを実践するまでの過程が重要だったのではないかと考えます。」（2年・男性）という感想のように、近代スポーツとしての卓球を相対化するための気づきを、この実践が導いたとイメージした受講者が多かった。

「普段とは違う形で卓球をすることができたということで改めて卓球の楽しさを感じる事ができたように思います。」（2年・男性）

「実を言えば、私はなまじ卓球のルールを知っているために、それ以外のルールを卓球と認めず、忌避していたので、このような場を通じてそのような偏見をなくすことができたのはとても喜ばしいことだと考えています。」（2年・男性）

既知のスポーツとしての卓球の実践のみでも、「初めての体験」のみでも、こうした気づきを導くことは困難であっただろう。ルールが「変則的」であるというイメージの背景には、既知のスポーツとしての卓球を最高の到達点とする妄信を読み取ることができる。スポーツとはいかなる文化なのかという点が教授されることなく、スポーツ実践を課せられるのみでは、現在のスポーツのあり方を相対化することはできない。よって、大学におけるスポーツ実践の必要性という観点から評価するならば、この試みには、スポーツ文化の主体的な継承のための構想力を育むものとしての価値を主張することができるだろう。

### 3. まとめ

本稿では、大学におけるスポーツ実践の現代史を素描するという目的から、筆者が担当した卓球授業の実践を再構成することを課題とした。最後に、大学におけるスポーツ実践の必要性という観点から、歴史的事実としてのこの実践の評価を試みた。結果は以下のよう

- 1) 授業の目的は、スポーツの歴史被拘束性を実践の中から理解し、その主体的な継承のための構想力を育むことであった。この目的は、大学の要請と、スポーツ実習科目の必要性をめぐる議論の歴史に規定されつつ、筆者の主観により設定された。
- 2) 授業は次のように展開された。前半部では、卓球の基本的な技術を習得しながら、既知のスポーツとしての卓球が、いかなる歴史的位置にあるのかを学習した。後半部では、クラスを5つの班に分け、班ごとに卓球を楽しむためのプログラムを作成し、実践した。特に後半部は、主体的な関与を受講者に要請し、スポーツ実践の場の創造について深く考える機会を提供したと考えられる。

3) この授業の実践は、受講者に対して、近代スポーツとしての卓球を相対化するための気づきを導く契機となったと評価できる。以上から、この試みには、スポーツ文化の主体的な継承のための構想力を育むものとしての価値が認められる。

スポーツ実習科目の授業実践に関する今後の課題として、歴史研究者の立場から以下のように付言しておきたい。スポーツ実習科目担当者は研究者である。よって体育・スポーツ科学の知見を直接授業に反映できる機会に恵まれている。いかなる研究領域であっても、科学的な研究成果に基づく知見は、受講者のスポーツに対する理解を深化させるはずである。今日のスポーツのあり方は、決して普遍的なものではない。よってそのあり方の模索については主体的な関与が可能である。筆者は、こうした歴史学から得られた知見を、大学におけるスポーツ実践からも伝達可能であると考えている。

### 註

- 1) 「大学におけるスポーツ実践」：本稿では、大学の中で実践されるスポーツ活動の総称を意味している。授業、課外活動を含む。大学のみならず、学校以外でのスポーツ実践の場を意識化するためにこの用語を用いている。

### 文 献

- 1) 九州大学全学教育機構，平成14年度全学教育科目履修の手引き，2002年，p.73.
- 2) 大熊廣明，わが国学校体育の成立と再編における兵式体操・教練採用の意味——明治・大正期を中心として——，筑波大学体育科学系紀要，24，2001年，p.68.

(平成16年6月12日受付)  
(平成16年9月13日受理)

## 大学体育の地域社会への貢献

県立長崎シーボルト大学 松 永 恵 子  
榎 本 瞳  
谷 口 茜  
山 口 郁 美

### Contribution to a Local Community of Physical Education in a University

Keiko MATSUNAGA, Hitomi ENOMOTO, Akane TANIGUCHI and Ikumi YAMAGUCHI

*Siebold University of Nagasaki*

#### I. はじめに

平成15年4月に公立大学協会が「これからの公立大学」を発表した。これによると「公立大学の設置理念として共通することは、地域社会への貢献であり、そこに要求されるのは、地域の特性、要求を反映した活動目標を掲げ、時代のニーズを反映させながらそれを随時更新していく小回りの利く管理運営であろう。(中略) 地域社会が求める地場的課題(高齢化・少子化社会のリカレント教育等)のローカル性は同時に人類社会が共通に直面するであろうグローバルな課題を先取りするパイオニアとしての側面を持つ。(中略) 公立大学は、教育の場としての地域貢献も重要な使命で、ローカル性とグローバル性が高度に調和した教育と研究とを同時に追求する姿勢が、公立大学の今後の発展を導くものであると考える。(中略) その存在そのものが地域貢献のためにあり、地域社会の活性化のためにあるという自覚が教員・職員の中に必要である。」<sup>2)</sup>と述べている。

これより、保健体育教員においても、一人一人が地域社会と大学の接点から、今自分にできることは何か? 学生とともにできることは何か? など創造的な視点から研究課題を探索することにより、教育と研究の融合が可能となると考えた。そこで今回は地域社会とのかかわりを目的として卒業研究に取り組み、地域社会への貢献の可能性について検討したので報告する。

#### II. 方法及び結果

本学の卒業研究は、3年次前期に学生が興味・関心あるいは前年度の卒業研究の内容などを参考にして当該ゼミ担当教官と相談し決定する。但し、ゼミの開講は3年次後期からであり、開講形態は3年次後期は実験、実習が多いのでオフィスアワーで、4年次には年間通して毎週開講となる。単位はそれぞれ2単位、4単位の計6単位が与えられる。健康スポーツ科学ゼミの学生は3年次後期に筆者が本大学で開講している転倒予防教室において地域住民とかかわり、受講者からの栄養に関する質問をもとに、この教室の休憩時間に計6回のミニ講座を開講した。主な内容は肥満予防の食事、高脂血症、高血圧予防の食事、骨粗鬆症予防の食事、サプリメント、だし等についてである。4年次にもこの要領で3講座を開講した。学生はこの転倒予防教室への参加の機会を得ることにより、地域住民の栄養への関心と問題点を把握しながら、卒業研究のテーマを絞っていった。

#### 研究 I. 幼児の運動能力と運動遊び・食生活との関係

谷口は学校栄養士を志望しており、子どもの健康と食教育とのかかわりに関心を持った。生活習慣病予防は乳幼児期からの運動・栄養・休養の励行にあり、その大切さを母親に伝えたいという願いから、標記タイトルを卒業研究テーマとした。その研究結果の概要は14～15頁のとおりである。

研究Ⅱ. 食環境の色彩と健康および生活習慣との関連

山口は食環境と色彩に関心を持ち、色彩と健康の関連を調査した。その基盤になったのは、筆者らが平成12年に報告した長与町における「地域住民の健康や運動・スポーツに関する意識調査」<sup>3)</sup>であった。これによると4,326人の回答のうち1年間何も運動していなかった人は42.3%で、その理由は表1のとおり、仕事が忙しい、機会がなかった、年をとった、体が弱い、他の趣味活動が楽しい、運動が好きではない等であった。そこで、公民館講座の運動部と文化部に参加している人々では、健康・生活習慣に関する内容にどのような特徴がみられるか検討した。その結果、図1のように文化系と運動系の両講座に参加している人のほうが健康・生活習慣が高得点であった。特に文化系の

人は運動に関する得点が有意に低下していた。また、色彩と健康・生活習慣との関係では、ランチョンマットの茶色に相関がみられ、健康・生活習慣が優れている方が、肯定的なイメージをもっていた。その研究結果の概要は16～17頁のとおりである。

研究Ⅲ. 地域高齢者を対象とした運動の介入による行動変容：体力テストとQOLに関する調査

榎本は壱岐郡出身で祖父の影響から高齢者の健康に関心があり、標記タイトルを卒業研究テーマとした。体力測定を啓発教育前後に2回行いその変化を検討した。またコントロール群として、長崎市と長与町の老人会々員の体力測定を実施し比較検討した。その研究結果の概要は18～19頁のとおりである。

表1 運動・スポーツを行わなかった理由

	他の趣味活動が楽しい	仕事が忙しい	体が弱い	年をとった	場所・施設がない	仲間がない	指導者がいない	お金がかかる	運動・スポーツが好きでない	部活動で嫌な経験をした	その他	機会がなかった	わからない	特に理由なし
全 国	—	45.5	14.7	16.1	2.6	6.2	1.0	1.8	12.1	—	8.8	10.4	0.8	9.4
長 崎 県	—	39.9	9.1	23.8	5.7	7.6	1.7	3.0	12.8	—	6.2	27.4	1.6	26.8
長 与 町	14.9	50.9	15.5	24.4	8.0	10.7	1.0	11.6	14.9	1.2	1.1	46.4	2.2	1.2
(男 性)														
全 体	14.0	45.3	17.1	29.1	7.6	10.4	0.7	6.7	13.0	1.2	0.3	49.8	2.8	1.3
20～29歳	4.7	69.8	2.3	4.7	11.6	14.0	0.0	16.3	16.3	0.0	0.0	60.5	4.7	0.0
30～39歳	8.6	75.3	2.2	0.0	8.6	10.8	1.1	9.7	6.5	0.0	1.1	47.3	4.3	0.0
40～49歳	9.8	65.6	9.8	12.3	9.8	12.3	1.6	13.9	11.5	1.6	0.0	51.6	3.3	0.8
50～59歳	13.2	53.5	10.9	22.5	5.4	11.6	0.8	3.1	15.5	3.1	0.0	55.0	3.9	3.9
60～69歳	17.4	27.7	21.3	45.8	6.5	11.6	0.7	5.2	16.1	0.7	0.7	49.7	1.9	1.9
70歳以上	21.7	9.3	41.1	60.5	7.0	4.7	0.0	0.0	11.6	0.8	0.0	41.1	0.8	0.0
(女 性)														
全 体	15.4	54.2	14.4	21.6	8.3	10.9	1.2	14.6	16.0	1.2	1.6	44.3	1.5	1.1
20～29歳	13.7	63.7	1.4	2.1	17.8	14.4	0.0	26.0	8.9	2.7	0.7	48.0	0.0	1.4
30～39歳	12.2	82.2	5.6	1.4	10.3	9.4	1.4	22.9	17.3	0.0	1.9	38.3	1.4	1.4
40～49歳	14.4	65.5	13.1	12.7	8.7	12.2	0.9	17.9	16.2	0.9	2.6	48.9	1.8	1.8
50～59歳	18.2	45.8	16.4	22.9	5.1	14.0	1.4	8.4	16.8	1.9	1.4	48.6	1.9	0.9
60～69歳	22.8	30.4	21.1	44.4	5.3	9.9	2.3	7.0	23.4	0.6	1.8	43.3	0.6	0.0
70歳以上	10.0	20.0	35.8	63.3	2.5	2.5	0.8	1.7	10.0	1.7	0.8	35.8	3.3	0.8

3)

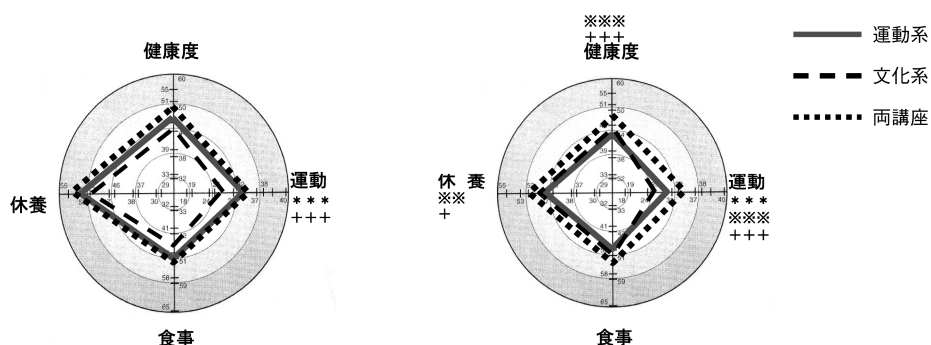


図1 講座別の比較

運動系と文化系 +++ p<0.001 + p<0.05 運動系と両講座 \*\*\* p<0.001  
文化系と両講座 ※※※ p<0.001 ※※ p<0.01

## 研究Ⅰ．幼児の運動能力と運動遊び・食生活との関係

谷 口 茜

### 目 的

体力は、人間の活動の源であり、健康の維持と意欲や気力などの精神面の充実に大きく関わる重要なものである。しかし、近年、体力・運動能力は低下を続けており、幼児においても同様の傾向を示している。幼児の体力・運動能力の低下には、生活環境と遊び、食生活が関係していると考えられ、これらについてはすでに研究が行われている。しかし、体力・運動能力向上のために地域的要因を考慮した具体的な取り組みを検討した先行研究は見当たらない。そこで、本研究は、幼児の運動能力と運動遊び、食生活との関係について地域的要因を加えて明らかにすることにより、体力・運動能力向上のための具体的な取り組みを検討した。

### 方 法

調査対象：N県の2幼稚園（220人）と九州管内（沖縄を除く）の6幼稚園と4保育園（950人）に通う4～6歳児1170人とその保護者及び保育士。

調査期間：平成14年10月～平成15年7月

調査内容：1. 身体測定 身長、体重からカウプ指数を算出。2. 運動能力測定 幼児運動能力テスト（25m走、立幅跳び、ソフトボール投げ、両足連続跳び越し、体支持持続時間）を実施。3. 運動遊び、食生活に関する調査 幼児の園や家庭での運動遊びや食生活について、担任（回収率：99.9%）と保護者（79.9%）に回答を依頼。4. 園の環境と運動活動・クラス担任の運動活動に関する調査 園の環境や運動指導、担任の運動経験や保育内の運動活動について、園長（100%）と担任（87.9%）に回答を依頼。

解析方法：t検定、 $\chi^2$ 検定、Pearsonの相関係数の検定。危険率5%未満をもって有意水準とし、検定結果は\* $p < 0.05$ 、\*\* $p < 0.01$ 、\*\*\* $p < 0.001$ と表記。

### 結 果

#### 1. 運動能力測定

発達傾向では、N県は、一部の年齢を除いて1997年の全国、九州と同様の傾向を示した。しかし、図1に示したように、N県と親世代である1973年の全国を比較した場合、N県はソフトボール投げと体支持持続時間において著しい低下がみられた。また、運動能力基準表による評価では、N県と九州を比較した場合、N県の方が低く、両者で有意な差がみられた。さらに、N県の幼児は、運動が得意な幼児と不得意な幼児の二極化の傾向がみられた。

#### 2. 運動遊びに関する調査

N県と九州を比較した場合、N県は九州よりも園や家庭で運動遊びをよく行い、両者で有意な差がみられた。また、園と家庭の運動遊びは有意な相関がみられ、活発な幼児は、園と家庭で運動遊びをよく行っていた。さらに、表1-1に示したように、運動遊びは、運動能力と有意な相関を示し、運動遊びをよく行う幼児ほど運動能力が高い傾向がみられた。

#### 3. 食生活に関する調査

朝食の食欲では、N県の幼児の31%が食欲がなく、食欲がある幼児は、園や家庭で活発に運動遊びを行っていた。野菜の好き嫌いでは、幼児の約3分の2が野菜嫌いであり、運動の不得意な幼児は、野菜嫌いが多

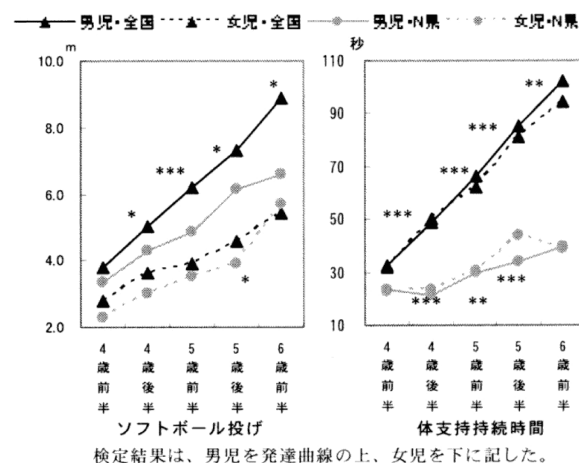


図1-1 N県と1973年の全国平均の発達曲線

表1-1 身体、運動能力、運動遊び、食生活の相関

	身長	体重	カウプ 指 数	25m 走	立幅跳び	ソフト ボール投げ	両足連続 跳び越し	体 支 持 持続時間	個人平均
園での過ごし方	0.060	0.004	0.046	0.327**	0.273***	0.263***	0.210**	0.294***	0.400***
園での運動遊び	-0.010	-0.042	0.020	0.309**	0.235**	0.337***	0.220**	0.288***	0.398***
園と一緒に遊ぶ友達	-0.014	0.023	0.110	0.365***	0.120	0.067	0.079	0.181**	0.195**
家庭で外遊びをする時間	-0.062	-0.103	-0.067	0.187	0.091	0.028	0.093	0.132	0.154*
家庭での運動遊び	0.005	0.000	-0.068	0.322***	0.294***	0.316***	0.321***	0.316***	0.474***
家庭にある遊具数	-0.062	-0.051	0.045	0.154	0.145*	0.145*	0.214**	0.088	0.217**
家庭で遊ぶ友達	0.128	0.081	0.097	0.116	0.008	-0.002	0.037	0.103	0.072
家族遊び	-0.003	-0.063	-0.061	-0.001	0.106	0.123	-0.001	0.092	0.112
親が考える幼児の運動能力	-0.120	-0.085	-0.075	0.358***	0.370***	0.259***	0.253***	0.324***	0.467***
父親の運動経験	-0.123	-0.078	-0.041	-0.220*	0.006	-0.078	-0.089	-0.054	-0.097
母親の運動経験	0.025	0.005	0.022	0.132	-0.042	-0.003	-0.031	0.131	0.039
朝食の食欲	0.061	0.141*	0.216**	0.162	0.000	-0.020	0.074	-0.030	0.036

く、ピーマンやトマトを嫌いな割合も高率であった。

#### 4. 親が考える幼児の運動能力について

親から運動能力が優れていると思われていた幼児は、実際の測定でも良好な結果であり、運動遊びや家族遊びをよく行っていた。親は幼児の運動能力を運動遊びや家族遊びから正確に把握していた。

## 考 察

幼児の体力・運動能力は、親世代よりも明らかに低下しており、体力が生きていく上で極めて重要な要素となっていることを考えると、日本の将来を背負っていく幼児のこのような状況は重大な問題である。

またN県より九州の運動能力測定結果が良好であった。その理由として、園自体が運動に力点をおき、クラス担任も保育経験が長く、幼児に対して適切な環境を作り運動遊びを展開していた。このように幼児の体力・運動能力の向上には、運動能力と有意な相関がみられた運動遊びが効果的であり、幼児の生活の大部分を占める園と家庭が一体となり、幼児に適した運動遊びを展開していくことが重要であると推察された。

幼児にとって運動遊びは、体力や運動能力の発達だけでなく、知覚や認知の発達、社会性の発達を促し、パーソナリティーの形成や衛生習慣に関する態度の形成を養うものである。さらに、幼児期に運動遊びから

得る有能感により、積極的で活発、運動好きになり、運動の機会を増加させるなど、将来のライフスタイルに大きな影響を及ぼす。以上から、幼児期の運動遊びは、いろいろな動きを獲得すること、運動の楽しさを知り、自発的に運動に取り組めるようにすることが大切である。

そのためには、様々な運動遊びを行うこと、集団的な遊びにより、活発でない幼児の活動量を上昇させることが効果的である。その際、保育者は、幼児期は心身の発達に個人差が大きく、発達途上であることを忘れず、運動が不得意と決めつけることなく、幼児の長所をほめることで幼児が有能感を抱くように働きかけることが重要である。

以上のように、幼児の運動能力は、長い人生に影響を与えるため、幼児の体力・運動能力の向上に努める重要性を啓発したい。

## ま と め

本研究では、幼児の運動能力と運動遊び、食生活との関係が明らかになり、幼児の体力・運動能力の向上には、特に運動遊びを推奨することが重要であると示唆された。その際には、幼児が運動遊びから有能感を抱くような保育者の働きかけが必要である。

## 研究Ⅱ. 食環境の色彩と健康および生活習慣との関連

山口 郁 美

### 目 的

人が物を食べる際に働く感覚のうち、視覚の与える影響は大きい。現在、社会心理学の領域では、被服や化粧などで「装う」ことは、日常生活に刺激を与え、情緒を活性化し、心理的な側面に影響を与えると考えられている。このような「装い」を食環境の中にテーブルアクセサリーとして取り入れることによって、日常生活に刺激を与え、情緒を活性化し、視覚的に食欲をそそるような演出をすることには意味があると考えられる。しかし、食品の色彩嗜好に関する研究は数多くみられるが、テーブルアクセサリーの色彩に関する研究は少ない。そこで、本研究ではテーブルアクセサリーの一つであるランチョンマットに着目し、異なる色彩のランチョンマットによる料理全体の印象の違いを調査し、さらに健康や生活習慣との関連を検討することを目的とした。

### 方 法

調査対象：20～94歳の長与町の6ヶ所の公民館活動参加者683名、本学転倒予防教室受講者34名（計717名）に健康と生活習慣に関する調査を実施。このうち、色彩に関する調査を208名に実施。

調査期間：平成15年5月～7月

調査方法：1. 色彩に関する調査 6色（白・水色・茶色・ピンク・灰色・オレンジ）の色画用紙上に実物大料理カード（和食の魚料理）を並べて写真撮影し、コンピュータ画面上に読み込み、カラー印刷して試料を作成した。この異なる6色のランチョンマットの色彩から受ける料理全体の印象の違いをSD法で調査した。回収率34.6%。2. 食に関するライフスタイルの調査 食行動や食に関する意識を調べるためにアンケートを実施し、得点化した。また、家庭のテーブルアクセサリー利用状況を調査した。3. 健康と生活習慣に関する調査 トーヨーフィジカル健康度・生活習慣診断検査の検査用紙に従い、健康度12、運動8、食事13、

休養14の計47項目についてアンケートを実施した。回収率40.3%。

解析方法：t検定、 $\chi^2$ 検定、一元配置分散分析、多重比較検定（最少有意差法およびTamhaneのT2法）を行った。いずれも危険率5%未満をもって有意水準とした。（\* $p<0.05$ , \*\* $p<0.01$ , \*\*\* $p<0.001$ ）

### 結 果

#### 1. 色彩に関する調査

料理全体の印象はランチョンマットの色彩によって異なり、中でも白に関しては男女ともに、多くの人が肯定的なイメージを持っていた。

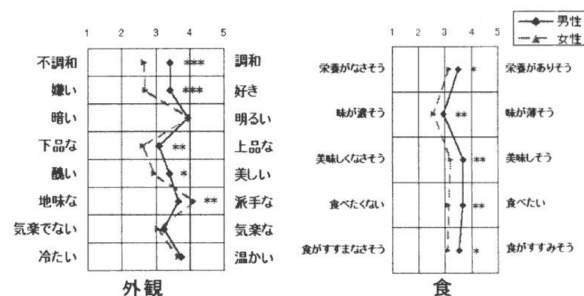


図2-1 オレンジのイメージプロフィール

図2-1はオレンジのイメージプロフィールである。オレンジについては男女間に色彩嗜好に違いがみられ、男性は肯定的なイメージを持っていたが、女性是否定的なイメージを持っていた。

#### 2. 健康と生活習慣に関する調査

健康度・生活習慣パターンが充実型と判定された人が66.1%、健康もしくは生活習慣に何らかの問題があった人は33.1%であった。所属する講座別で比較すると、文化系は運動系や両方の活動を行っている人より健康度、運動、食事、休養の全てにおいて、得点が低い傾向にあり、運動に関しては有意に得点が低かった。

#### 3. 色彩と健康・生活習慣との関連

図2-2は、色彩嗜好の違いが顕著であった茶色に対する男性の運動の上・下位群のイメージプロフィールである。茶色については健康と生活習慣が優れている



る人の方が、何らかの問題がある人より肯定的なイメージを持つ傾向がみられたが、他の色については色彩嗜好に大きな違いはみられなかった。

#### 4. 食に関するライフスタイル

多くの女性は料理が好きで、自分で料理を作っていると回答したのに対し、男性は料理は好きではなく、自分で料理は作らないと回答した人が多かった。

表2-1は健康度・生活習慣パターンが充実型とその他の判定の食に関するライフスタイルのアンケートの平均値である。充実型の方が色彩に関心が高かった。

### 考 察

色彩の違いによって外観や食に関するイメージに変化がみられたことは、日本人はどの属性(居住地域・性・年齢)においても、約25%の割合で白を好むことや、調査時期が5月から7月であったため、夏という季節の影響が考えられる。一般に、食欲を低下させるといわれている寒色系の水色が、本研究では極端に嫌悪されなかったのは、視覚の上で感じる心理的な問題であると推察された。オレンジは暖色系の色で食欲を増進させるといわれているが、女性が否定的なイメ

ジを持ったのは、食品の色彩嗜好には男女差があり、女性の方が色の種類に繊細に反応し、色彩嗜好は20歳頃にはほぼ個人的に定着すると考えられていることから、本研究でも女性の方が色彩に対して繊細に反応したからではないかと推察された。健康と生活習慣が優れている人は、茶色に肯定的なイメージを持ったが、他の色彩に関してはそのような傾向はみられなかった。色彩嗜好の教養説では、人間は年をとると自然に落ち着いた色彩、あるいは灰色がかった色彩、明度や彩度は低いものを好むようになり、人間は高度に教育されるほど、それだけ落ち着いた色彩を好むようになるといわれている。本研究では茶色のみその傾向がみられた。食に関するライフスタイルの調査では、健康や生活習慣が優れている人の方が色彩に関心が高かった。これは健康や生活習慣が優れている人には精神的ゆとりが生まれ、食べるだけでなく、その色彩や環境にも関心をもつようになるのではないかと推察された。健康と生活習慣に関する調査でも、運動の重要性が示唆され、運動や身体活動は、幸福感を高める効果をもつことから、運動の習慣や意識がある人には幸福感が高い人が多く、その幸福感が精神的ゆとりにつながると考えられる。この精神的ゆとりが食に関しては色彩への関心として表れているのではないかと推察された。

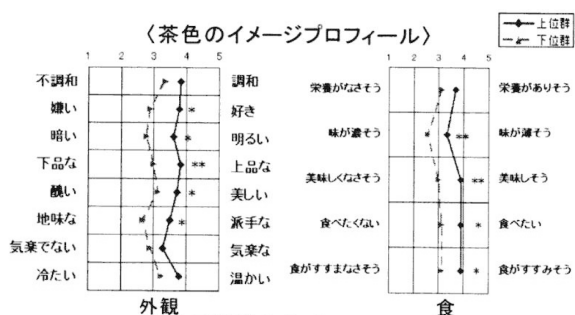


図2-2 男性の運動の上・下位群の比較

### ま と め

食環境の色彩嗜好は、性差や健康・生活習慣によって違いがみられた。また、健康と生活習慣の調査からは、文化系の活動のみならず、運動を行うことの重要性も示唆された。運動は健康や生活習慣の維持増進や、色彩についてもキーワードとなることが推察された。

表2-1 食に関するライフスタイルの調査

		充実型(n=134)		その他(n=48)		検定
		M	S.D	M	S.D	
調 理	自分で料理を作る	4.2	1.14	4.3	1.17	n.s.
	料理を作ることは好きである	3.9	1.09	3.7	0.99	n.s.
	外食を頻繁にする	2.0	0.97	2.1	0.81	n.s.
	一人で食事をすることが多い	2.0	1.12	2.3	1.30	n.s.
料 理	料理の色彩には気を使っている	4.0	0.96	3.6	1.07	*
	理想としては料理の色彩にはこだわりたい	4.1	0.95	3.8	1.04	n.s.
	食器の色彩やデザインにはこだわっている	3.7	0.88	3.1	1.04	**
色 食 器	理想としては食器の色彩やデザインにはこだわりたい	4.1	0.88	3.8	1.16	n.s.
	食事をする環境(ランチョンマットの利用やテーブルに花を飾るなど)にはこだわっている	3.3	1.05	2.7	1.03	**
彩 食環境	理想としては食事をする環境(ランチョンマットの利用やテーブルに花を飾るなど)にはこだわりたい	3.8	1.04	3.7	1.11	n.s.
	色彩は食卓を豊かにすると思う	4.5	0.67	4.2	0.97	*

## 研究Ⅲ. 地域高齢者を対象とした運動の介入による行動変容

### — 体力テストとQOLに関する調査 —

榎本 瞳

#### 目 的

現在、我が国の高齢化は、医療や介護に関わる費用の増大だけでなく、高齢者一人ひとりのQOLに関わる問題を提起している。その中で現在の老年学の目標は“successful aging（理想的な老い）”の達成にあり、健康問題も「寿命の延長」ではなく、「長寿の内容」が問われるようになってきた。高齢化がますます進展する中で、高齢者が体力を保持増進し、健康で生きがいのある豊かな日常生活を送る為には、まず自分の体力や生活習慣を十分把握することであり、運動への意識づけが重要となる。本研究では、高齢者を対象とした体力テストとQOLに関する調査を実施し、自らの健康度の目標を設定し運動への動機づけを図ると共に、体力の維持増進に対する運動効果を検討し、運動指導の手がかりを得ることを目的とした。

#### 方 法

調査対象は60～79歳の壱岐郡老人クラブ111名（測定2回目50名）と長崎市内・長与町老人クラブ95名で、調査期間は平成15年5月～11月である。調査内容は身体測定（身長・体重・血圧・体脂肪率・BMI・問診・血液検査）、日常生活活動テスト、体力測定（日常生活動作：10m全力歩行・最大1歩幅、文部省新体力テスト：握力・上体起こし・長座体前屈・開眼片足立ち・10m障害物歩行・6分間歩行）、QOLに関する調査、運動指導（ウォーキング・ニギニギ体操等）、2ヶ月間の歩数記録等である。壱岐地区に関しては、運動指導後、2ヶ月後に同様の調査を実施した。

すべてのデータの解析はt検定、一元配置分散分析、多重比較（LSD法とTamhaneのT2法）を用い、危険率5%をもって有意水準とした。（\* $p < 0.05$ ，\*\* $p < 0.01$ ，\*\*\* $p < 0.001$ ）

#### 結 果

図3-1は日常生活動作で、両地区とも全国平均より良好であった。さらに、長崎・長与地区の加齢に伴う変化が著しいのに比べ、壱岐地区では加齢に伴う変

化が緩行で、加齢とともに全国平均を上回っていた。しかし、体力テストでは両地区とも全国平均より低い傾向であった。また、図3-2の通り、壱岐地区で啓発教育を行った2ヶ月後の測定では記録の向上がみられた。

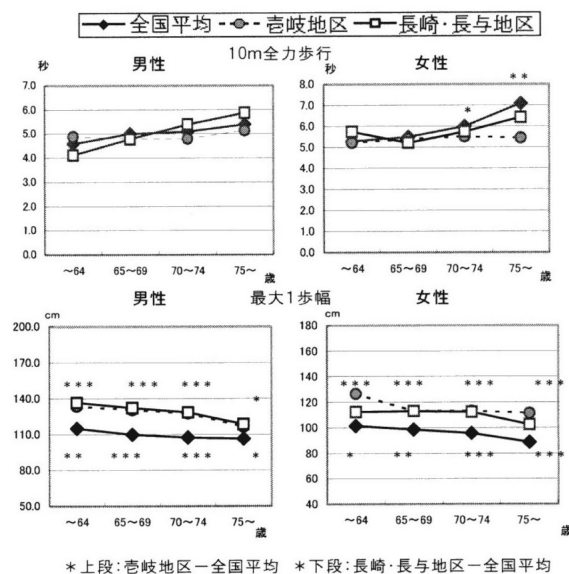


図3-1 日常生活動作

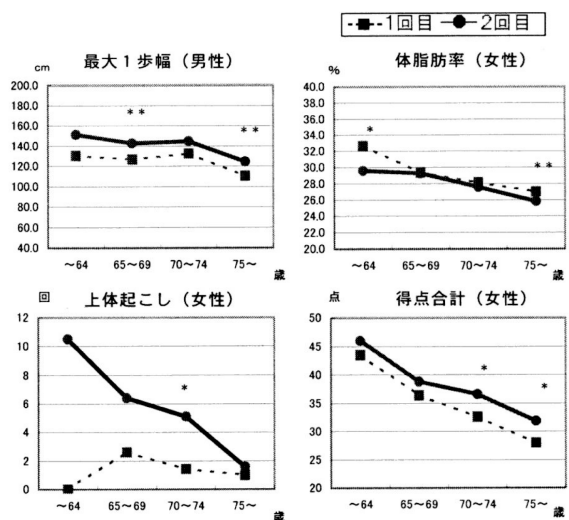


図3-2 1回目と2回目の変化（壱岐地区）

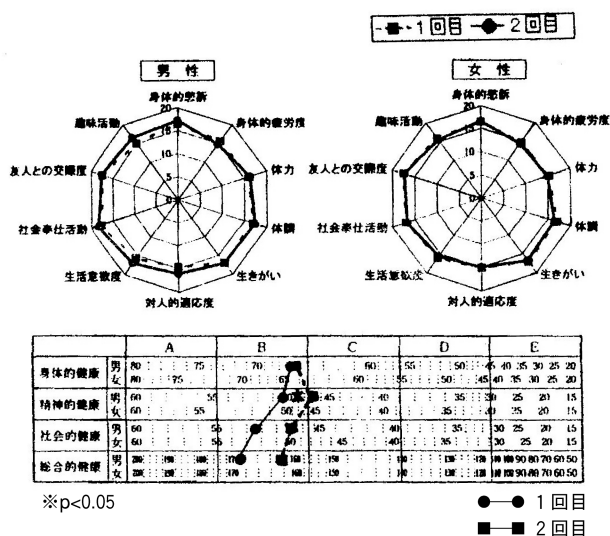


図3-3 1回目と2回目のQOLに関する調査(吉岐地区)

QOLに関する調査では、長崎・長与地区よりも吉岐地区の健康度が高かった。図3-3の吉岐地区のQOLに関する調査の変化では、男性の2回目の結果が良好であった。その中でも「精神的健康」の項目が5%の有意水準で得点が良好であった。その背景には75歳以上のグループの「趣味活動」の項目が、5%の有意水準で得点が向上していたことがあげられる。一方、女性では有意な差は認められなかった。このように、男性は1回目よりも2回目の結果が向上しており、女性は1回目の結果が良好であった。

表3-1 2ヶ月の歩数記録平均(吉岐地区) (歩)

		70歳未満	70歳以上
男性	平均	—	8747
	標準偏差	—	4112
女性	平均	8070	9050
	標準偏差	1726	2683

表3-1は吉岐地区の2ヶ月間の平均歩数であり、男性、女性ともに健康日本21の2010年までの指標(男性:6700歩、女性:5900歩)を上回っており、個人では33名中27名(81.8%)が指標を上回っていた。

## 考察

中高齢期における体力の維持・増進には継続的な運動・スポーツ活動が効果的であることが多くの研究から明らかになっており、運動教室を通じた運動・スポーツ活動が広く推奨されている。本研究で長崎・長与地区よりも吉岐地区の体力やQOLが高かったのは、普段から農作業・漁業等の仕事や徒歩による移動等により、日頃の活動量が大きいことや、地域交流が盛んであることが背景にあると推察された。また、啓発教育を行った吉岐地区では、体力が向上し、2ヶ月間でもウォーキングやニギニギ体操等の効果が実証された。また、吉岐地区は2ヶ月間、ウォーキング等を行った結果、男性はQOLが向上していたのに対して、女性は低下傾向にあった。男性に関しては、定期的なウォーキング参加が、高い生活満足度をもたらすと同時に、「ウォーキング行為」自体に自己の存在を確認し、充実感をもたらす効用が認められた。女性に関しては農繁期等により、生活全般が多忙になり、実際の体力は向上していたにも関わらず、特に「身体的健康」の項目に負の要因が生じ、全体的なQOLが低下したのではないかと推察された。また、80歳以上の方であっても、「寝たきり」を避け、健康寿命を延命するだけの十分な体力が必要であり、体力測定の意味は大きいと思われる。実際、本研究では80~95歳(43名)の体力テストも実施することができた。高齢者にとって、体力テストに参加するということが、活動量を増やすとともに、活力を得てQOLを高めることが出来ると思われる。

## まとめ

高齢者であっても筋力の維持・向上を目指すことは可能である。その為には、動機づけとして地域で健康管理体制を構築し、主観的健康感を高めることにも効果がある健康づくり施策を、組織的かつ長期的な視点で展開していくことが重要となる。

### Ⅲ. 考 察

本学は地域密着・貢献をより推進するために、平成14年度から地域住民を対象とした講座を開講している。筆者も前述のように平成14年度から転倒予防教室を開講している。この講座に学生が参加し、栄養健康学科として地域住民の栄養や健康に関するニーズに応えるため「ミニ講座」を開講した。このような経験が保健所実習、病院実習、学校実習等において有益な示唆を与えている。

また、地域住民にとっても対象が学生なので、気楽に話せるなど好感を持って接してくれた。このことについては「体育・スポーツ教育研究第4号」で村木<sup>4)</sup>が報告している。

学生はこの転倒予防教室に参加することによって、地域住民が抱えている問題や関心事を知り、地域住民の立場に立って物事を考え、問題意識を深めることにより、徐々に卒業研究のテーマを絞っていった。またこの経験は引き続き卒業後の職場の活動にも反映できるのではないかと考えた。

富山<sup>5)</sup>は地域スポーツ振興に果たす大学の役割—大学スポーツの地域貢献—で、大学スポーツの地域貢献を「教官」「学生」「地域」「関係するその他の組織」の4者の関係性の視点から分類している。筆者は学生の知識や技能を提供し、学習経験や実践の場とするだけでなく、卒業研究という形で積極的に地域住民とかかわり、その成果を地域住民に還元できればより意義深いものになると考えた。すなわち地域住民の実態に基づいた研究を行い、その成果を市町村役場や地域住民に還元することである。

谷口の研究は昭和60年以降日本人の体力が幼児から高齢者まで低下の一途をたどっている現状<sup>1)</sup>から、親世代と現在の幼児の体力の比較を行い、体力のどの要素が低下しているかを検討した。その結果、現在の幼児のほうがどの種目も劣っていたが、特に運動能力ではソフトボール投げと体支持持続時間が劣り、体力要素としては協応性と筋持久力が劣っていた。体支持持続時間は遊んでいてきつくなったら止める、難しくなったら止めてしまうなど忍耐力や克己心の欠如をも表出している。ソフトボール投げは遊びの経験不足が考えられる。谷口はこの体力低下の原因と、親子で運動することの重要性について直接保護者会で報告した。また、16年度も幼稚園で運動能力測定が実施されその結果が報告されれば、家庭でも親子で運動する機会が増えるのではないかと期待される。

山口の研究は地域の公民館の文化系講座と運動系講

座の参加者で、健康や生活習慣にどのような相違がみられるか検討したものがある。その結果図1のように文化系と運動系の両講座への参加者がより健康意識が高得点で、文化系の運動の項目が有意に低得点であった。前述のように長与町住民の1年間に運動しなかった理由の一つに、運動が嫌い、他の趣味活動の方が楽しいがあげられていた。日本女性の平均寿命は85歳で、健康寿命は78歳である。健康寿命を延命するためには生活習慣病の一次予防である栄養・運動・休養のバランスが不可欠である。この運動が嫌いな人にどのような働きかけをして、体力低下を防ぎ寝たきりにならないようにするかが、市町村役場における具体的な健康日本21の対策であると考ええる。その意味で、調査結果を公民館講座に参加している一人一人に返送できたことは、地域住民が積極的な運動によって健康を向上させ、生活習慣を改善することの必要性を新たに認識する良い機会になったと考える。また、公民館は地域におけるコミュニティセンターなので、各地区の老人会の年間計画に健康体操等を企画して、老人が楽しく運動できる機会を設けることもできるのではないかと考える。

榎本の研究は高齢者であっても啓発教育によって体力が向上することを実証した報告である。今回95歳をはじめ43名の80歳以上の体力の実態を把握することができた。健康診断と同様に各ライフステージで体力測定を行い、地域住民の健康、体力を把握できれば「健康日本21」の生活習慣病の一次予防に寄与する意義は大きいと考える。

このように、学生の卒業研究は地域住民の実態を把握し、その問題と対策を検討して地域住民へ還元する形式をとれば、大学体育としての地域貢献に大いに寄与すると考える。

実際、長与町ではこの卒業研究の提言を受けて、平成16年度から集団成人健康診査でシニア体力測定（握力・棒反応・長座体前屈・開眼片足立ち）を7～8月に実施予定であり、筆者も測定員として係わることになった。この試みが長崎県下全域に広がれば幸いである。また、長崎市でも昨年同様B型機能訓練対象者の体力測定を5月～8月に実施予定である。介護予防としてまた体力若返り法として体力測定の結果に基づいた運動処方を含め今後も継続していきたい。

### Ⅴ. まとめ

県立大学の設置理念の一つに地域貢献があげられる。大学体育の一環である卒業研究を通して、地域住民と積極的にかかわることができた。このことは学生の立

場からは、現在社会が抱えている問題を肌で感じ取ることができるとともに、個人として少子高齢化社会の中でどのような役割を果たしていくべきかを自覚することができたと考える。

## 文 献

- 1) 中央教育審議会：子どもの体力向上のための総合的な方策について (答申), 1-22, 2002
- 2) 公立大学協会第1委員会：これからの公立大学, 6, 2003
- 3) 松永恵子他：長与町民の健康・体力及び運動・スポーツに関する調査第2報, 県立長崎シーボルト大学健康スポーツ科学研究室, 19, 2000
- 4) 村木里志他：地域住民・学生・教員の地域共生を目的としたフィットネス教室の開催, 体育・スポーツ教育研究第4巻第1号, 15, 2003
- 5) 富山浩三：スポーツを通じた大学の地域貢献プログラムの開発, 体育・スポーツ教育研究第4巻第1号, 5-11, 2003

### 谷口茜の主な参考文献

- 1) 加賀谷淳子：幼少期の身体活動評価の基本とその問題点：臨床スポーツ医学20-4, 397-405, 2003, 文光堂
- 2) 小林寛道：現代の子どもの体力 — 最低必要な体力とは —, 体育の科学40-1, 14-19, 日本体育学会, 杏林書院, 1999
- 3) 近藤充夫他：幼児の運動能力検査の標準化と年次推移に関する研究 (課題番号09480014), 1-90, 1999
- 4) 中村和彦：子どもの遊びの変貌, 体育の科学, 49-1, 25-27, 1999, 日本体育学会, 杏林書院

### 山口郁美の主な参考文献

- 1) 加藤雪子他：生活の色彩学, 朝倉書房, 1993
- 2) 川染節江：食品の色彩施行に関する年齢および男女間の変動, 日本家政学会誌, 38-1, 23-31, 1987
- 3) 大谷貴美子他：食空間と色彩, 食生活研究, 22-1, 12-18, 2001
- 4) 小野真紀子他：食卓環境の色が心理に及ぼす影響, 日本色彩学会誌27, 110-111, 2003

### 榎本瞳の主な参考文献

- 1) 荒尾孝：健康指標としての体力と QOL, 体育の科学50, 11, 2000
- 2) 丸山祐司他：高齢者の加齢と体力低下に関する研究 — 高齢者体力テストの結果から —, 日本健康教育学会誌11, 日本健康教育学会, 2003
- 3) 宮下充正：体力を考える — その定義・測定と応用 — 杏林書院, 1-185, 1997
- 4) 武藤芳照：転倒予防教室, 転倒予防への医学的対応 — 日本医事新報社, 1-189, 1999
- 5) 西嶋尚彦：新体力テストと ADL, 体育の科学50, 11, 2000

## 付 記

この九州地区大学体育連合の研修会は、以前は教員と体育会の学生リーダーとが集い、各大学間の情報交換の場として盛況であったと聞き及んでいる。そこで今後は、この研修会で学生の卒業研究を発表する機会を設け、各大学間の研究交換の場として活用できればと考え、今回の発表を試みた。(但し、発表の内容はこの研修会の研究テーマに沿った研究に限定することも必要であろう)このような学生の研究報告が、九州地区大学体育連合会の発展に寄与することを期待したい。

(平成16年6月12日受付)  
(平成16年8月31日受理)

## 大学に対する社会の評価と東海大学における 教育システムの改善の試み

九州東海大学 米 沢 久

### An Evaluation of the Improvement of Tokai University Educational System by the Public

Hisashi YONEZAWA

*Kyushu Tokai University*

キーワード；教育改革，第三者評価，質の保証

#### 1. はじめに

少子化および経済状況の変化に加え，国際的な競争力強化とその対策のため，大学においても質の向上と，社会に対する質の保証など重要な課題が多く出現してきた。

この件に関しては近年，諸外国の大学においても第三者評価制度の導入など変化が見られるようになってきている。

我が国では，平成3年の大学設置基準の大綱化以来，大学そのものが審査や評価の対象となり，教員の資格審査，研究評価，業績審査，学生による授業評価等が行われるようになってきた。

大学基準協会は，平成14年度の点検・評価項目による大学評価の基準等に関して，同年3月14日の評議員会並びに臨時理事会においてそれらを検討し，理事等による承認を得ている。

「じゅあ」<sup>1)</sup>によれば，大学基準協会の正会員は295大学であるが，これは全大学の42%に相当する。その内，約72%が平成14年度の大学基準協会の評価を受けている。

平成15年度はさらに，大学財政評価分科会の設置による大学の財政評価の実施，大学が大学評価による不利益を被らないための異議申立審査会の設置，そして大学財政評価分科会に公認会計士や，異議申立審査会に弁護士を置き，高等学校関係者や企業関係者の参画を得て評価に対する客観性や透明性を高めるなどの追

加措置等を行う計画である。

#### 2. 大学評価の動向

文部科学省の板東は，我が国における大学評価等に関する動向について次のように述べている。

大学においては質の向上を図り，社会に対してその質の保証が重要な課題となっている。国際的に満足しうる教育研究水準を確保するには，評価システムの確立が急務である。我が国は諸外国に比べ，第三者評価の整備・確立がかなり立ち遅れており，大学による主体的・機動的な組織の改編と，第三者評価等による質のチェック・システム整備が求められている。近年進められているのは，大学基準協会による改革プログラムの策定・実施，短期大学基準協会による地域総合科学科の適格認定，私立大学協会による新たな第三者評価機関設立の検討など，第三者評価の整備等である<sup>3)</sup>。

このような観点から中央教育審議会は，平成14年8月，大学の質を保証する新システムの構築に向けて次の3点に答申をまとめている。

- ① 大学設置認可の見直し
- ② 国が保証する評価機関による新たな第三者評価制度の導入
- ③ 違法状態にある大学に対する是正措置の整備

このような質の保証システムの構築を目指して、平成14年の臨時国会において学校教育法が一部改正された。但し、第三者評価制度の実施は平成16年度4月からの見通しである。

さらに、新たな第三者評価制度について、学校教育法の改正に伴い大学は自己点検・評価に加え、大学の教育研究の総合的な状況について、文部科学大臣の認証を受けた評価機関（認証評価機関）による評価を7年以内ごとに受ける必要があるとしている。但し、文部科学省は専門分野別評価について、分野別評価機関が十分に発達していない状況にあるとして、専門職大学院についてのみ第三者評価を義務づけるとしている。

しかし重要なのは、このような認証評価制度が大学の個性ある発展を支援できるシステムになっているのか、同時にまた、評価機関の自主性が尊重されるのかということである。この件に関して文部科学省は、申請し認証基準を満たした評価機関はすべて文部科学大臣の認証を受けることが出来るとし、文部科学大臣が認証やその取り消しを行うときは中央教育審議会への諮問を必要とするなど、制度の適正かつ慎重な運用確保を確約している。また、各大学はいずれかの認証評価機関を選んで評価を受けてもよく、認証評価の透明性と社会に開かれたものであるために、公表という形式をとるとしている。

ただ、適切な配慮を欠く評価結果の公表は、いたずらに大学の序列化等を助長するとの指摘もある。

さらに、今回の新構想の評価システムの工夫について外間は以下の6項目を挙げている。

- ① 点検・評価項目の精選・充実
- ② 大学財政評価の導入
- ③ 評価委員登録制の導入
- ④ 総合評価の結果としての可否認定
- ⑤ 大学側からの異議申し立て制度の確立
- ⑥ 認定証・認定マークの交付<sup>4)</sup>

このように評価に関するきめ細かな内容については多くの賛同を得られるかもしれないが、先進国のような経済的支援が十分受けられるのか、また補助金等を獲得する際に新たな枠が設けられないか、等々が心配される。

### 3. 大学基準協会による相互評価

相互評価について大学基準協会の赤岩は次のように述べている。

大学基準協会は独自の基準によって評価を行い、

大学教員による相互評価委員会によって大学の質の保持向上に貢献している。平成12年度から実地視察を義務づけるなど評価に信頼性を与え、平成15年度には勧告、助言、参考意見などこれまで行ってきた評価に加え、達成度や水準による評定を導入したい。また、評定に根拠を与えるため公開を前提とし、大学が社会に一層開かれ、ニーズに応えられるよう検討を重ねている。即ち、自己点検評価や評価される側が外部の評価者を選ぶ形式の外部評価、および大学評価・学位授与機構や大学基準協会のような評価機関による第三者評価等によって、評価は客観性が確保されつつある<sup>2)</sup>。

大学における質の向上と、社会に対する質の保証が叫ばれている今日、このように大学基準協会が自主的に独自の基準を設け、それによって評価が行われることは望ましいことだと考えられる。

### 4. 産業界から見た大学評価

我が国の第三者評価に関わる団体は、大学基準協会、短期大基準協会、私立大学協会の外に日本技術者教育認定機構（JABEE）、朝日新聞社「大学ランキング」、河合塾など数多い。

三菱総研は経済産業省の委託を受け、2002年から産業界の視点による大学の評価軸策定を進めている。これは産業競争力の観点からの評価のため理系の大学が対象ではあるが、文系の大学にも参考になると考えられる。寺下らは受験産業界の観点から、次のように大学評価の三つの柱を設定した。

- ① 人材の育成
- ② 知識の創造
- ③ 産業への還元

河合塾は各大学に対し、どのような課題があるのかについてヒアリングを行い、五ヶ年計画で評価軸を策定するとしている。この作業を進める中で寺下は「人材」が最も重要であると考え、次のように述べている。

企業がどんな人材を欲しがっているのか、大学がどのような人材を社会に送り出せるのが大学評価の中身を示すものであり、また、受験生が何を視点に受験大学を選ぶのか、例えば、これまでは入試難易度（偏差値）を用いてきたものが、最近はカリキュラムなどの教育内容、就職実績、研究内容に変化してきている。偏差値はなくならないと思われるので、将来は偏差値重視型と中身重視型の2極化が進むも

のと推測される。即ち、今後生き残っていく大学は、このような教育サービスの行き届いた大学である<sup>12)</sup>。

教育サービスについては各大学が今後生き残りをかけ、有効なアイデア開発を行うなど益々しのぎを削るものと推察される。第三者評価に関しても、この点に十分注目しながら動向を見極めようとしている。

## 5. 受験産業界の大学評価アプローチ

河合塾の谷口は受験産業界の視点から次のように述べている。

偏差値は元々どれくらいの学力があればどの大学に合格できるかという指標であったが、それがいつの間にか大学のランキングを偏差値で示すようになってきた。しかし河合塾では今後、偏差値だけを指標にするのではなく、大学における指導の中身、就職を含んだ出口の様子、大学独自の教育の魅力等、大学選びに関する新たな指標作りに着手している。そして大学における奨学生や留学などの各種制度、大学院などの教育環境等の資料を冊子にまとめ、河合塾の指導教員や高等学校の進路指導教員に報告する<sup>13)</sup>。

大学ばかりでなく受験産業界においても少子化と経済不況の影響を直接被っている。ここでも、きめ細かな調査と指導が求められている。

## 6. 九州東海大学の教育・指導方針

2003年10月、九州東海大学に新しく松前義昭氏が学長として就任した。就任挨拶の中で新学長は、学内の意見交換と相互理解の重要性、教職員、学生を含めた様々な分野での情報共有化による大学運営の機能化、そして学生に対する建学の思想とその解釈力構築の育成、地域との連携と就職強化の四項目を改革の柱に挙げている。

さらに学園通信 VISTA の中で、本学の教育方針について次のように述べている。

① 「出口」である就職の重視 — 学生の姿は直接社会から注目されるため、九州東海大学の「出口」はこうだという目標を持たせたい。社会から高いニーズのあるいくつかの分野で、本学学生がどの分野にどれだけ応えられるかを明確にし、カリキュラム再編成まで視野に入れた教育指導を実施する。

② 指導教員組織の重視 — 指導教員の役割は非常に

重要である。本学には現在、 Semester 制度上の指導教員、学年別指導教員、卒業研究別指導教員、就職指導上の教員など各種教員の役割がある。地区後援会での保護者との個別面談も行っているが、教員間の引き継ぎ連携等を密にし、学生をもっとフォローできる指導教員体勢を作りたい。九州東海大学をモデルケースとして成功すれば学園全体に発展運用できる。

③ 研究面での大学院の充実 — 研究面で重要なのは大学院の充実である。「各学部・学科の特徴的な研究は何か」を明確にし、これを特化させ、外部資金の導入や文部科学省の COE (Center of Excellence) にもつなげるよう発展させたい。そのために五ヶ年計画など大学あげてバックアップしたい。また、学園として検討している連合大学院が出来たときには九州東海大学も中核を担えるよう努力する。勿論、農学部ですでに進めている産学連携等は今後さらに推進していく。また、工学部については地域的諸問題等を調査しながら対処したい。さらに、附属高校で文系を志望している生徒の希望に応えるため、将来的には文系学科の設立も検討する。ただ、その際

の就職先の調査は重要である。

④ 教職員の同志的結合について — なぜ東海学園が存在しているのかという「建学の理念」を見失わないようにすべきである。各自が同志であるとの認識に基づき、各自の役割と自覚を持ってどんどんチャレンジしてほしい。仮に、修正が必要だと思ったらすぐに修正すればよい。そのときこそ「同志的結合」が大きなバックグラウンドとなる<sup>9)</sup>。

他大学と同様、本学においても受験生は年々減少の傾向にある。第三者評価に耐えるため本学では、学生による授業評価や大学の組織並びに教育形態の改善など色々試みられているが、何よりも教職員の意識改革が必要であろう。

教職員は一丸となり、新学長の提案した就職や指導教員制度の再認識、並びに大学院の充実等に向けて努力する必要がある。

## 7. 東海大学附属高等学校の教育改革

東海大学傘下の附属高等学校では、東海大学一貫教育委員会第三部会の提言を受け、授業改革キャラバンと称して授業評価、研究授業、一般公開などを実施している。以下、それらいくつかを紹介する。

付属菅生高校・中学校（大阪府）では、6月14・15



日の2日間、「発想が変わると授業が変わる」というテーマで授業改革キャラバンを行った。その内、数学展では数学の定理や方式を目で見てさわって理解したり、数学が日常のどのように活用されているのかなどの発表があった。CALL展ではミニプレゼンテーションが行われ、コンピュータを利用した英語教育やCALLの使い方などの講義があった。

複数の教科が連携した授業では、保健体育と家庭科の連携授業として「食事改革2003 — スポーツ選手の自己管理・食生活の自立を目指す」という授業が行われた。この他にも、「国語・情報」「社会・芸術」「物理」などの授業が行われた。来場者は小・中学生の親子連れなど延べ1500人を超えた。

付属高輪台高校（東京都）では、2000年度より毎年全教員に対し、生徒による授業評価が行われている。授業評価の目的は、高輪台高校の教育はどの方向に進むべきか、生徒の希望する教育は何であり、希望通りの授業が行われているか、そして最終的には教員がどのような授業改善を行っているのか、等々である。

提携校である付属山形高校（山形県）の授業改革キャラバンでは、「試行授業」として英語、数学、理科、「公開授業」として現代文明論、福祉、情報、デザイン、絵画が行われた。これら教育キャラバンには、東海大学学務担当理事、初等中等教育部長、九州東海大学学長室長も参加し、教育研究討議を行っている。各教科主任はキャラバンを終えた感想を以下のように述べている。

英語科 — 生徒にどのような力をつけて卒業させるのか、これまでのシラバスをさらに改善し、年間プロジェクト等を設定したり、教員間のチームワークをもっと密にするなど授業改革に臨みたい。

数学科主任 — 教具をもっと用い、生徒に教育作業を実施させ、数学の教員研修で学んだ内容をもっと多く取り入れるなど、詰め込み式でなく生徒自ら発見し作り上げていく授業を実施したい。

理科主任 — 理科では生徒に興味・関心を持たせることをポイントと考えており、教具を多く使い、生徒が自分で考えて実験を組み立てたり、夏休み等には生徒自身がテスト問題を作るなどの新しい試みを行いたい。

付属翔洋高等学校（静岡県）では、生徒による授業評価、さらには生徒ばかりでなく保護者や教員間による授業評価、授業の一般公開、保護者がいつでも授業参観が出来る環境作り等に力を注いでいる。何より教員の意識改革が重要と考え、今後意識の徹底をはかりたいとしている。

教育界への様々な影響は公立より私立の高等学校から先に現れる傾向にあるため、それら教育改革にも注目しておく必要がある。

## 8. 公立高等学校の教育改革

東海大学教育開発研究所の香取は Heuristics の中で公立高校の動向をまとめ、公立高校における推薦入試の拡大、学区制の撤廃、統合性や単位制への大幅な移行、クラス生徒数の少数化、教員の研修、ダメ教師の追放等を重要な解決課題として挙げている。

香取はダメ教師について、子供と向き合えず、子供が問題を起こしても何も感じない。また、同僚や生徒とのコミュニケーションもとれず、説得力が薄く、生徒を授業に参加させたり、考えながら知識や技能を身につけさせることができないといった資質に乏しい教員のことであるとし、また、教員は社会的責任を果たすためにも研鑽を続ける責任がある<sup>5)</sup>と述べている。

少子化等による教育界への波紋は、大学以前に高等学校から現われてくるため、高等学校で試みられている教育改革等にも十分注目しておく必要がある。

## 9. 松前重義のスポーツ・体育に関する教育思想

第1表 スポーツ・体育活動の教育効果（松前重義）

- |                                    |
|------------------------------------|
| 1. 体力の向上                           |
| 2. 健康の増進                           |
| 3. 学園内の活気高揚, 志気の鼓舞, 不良化等の防止        |
| 4. チームワークづくり, 団結, 精神的きずな助長, 連帯感の育成 |
| 5. 明るい校風づくり, 友人(友情)づくり             |
| 6. 礼儀作法の修得                         |
| 7. 健全な社会の創造への貢献, 幅広く器量の大きい人材の育成    |

第1表は著書、東海大学建学史（東海大学四十周年史編纂専門委員会編<sup>7)</sup>、青春に生きよう（松前重義著<sup>8)</sup>、我が昭和史（朝日新聞社編<sup>11)</sup>）に著述された東海大学の創設者、松前重義初代総長のスポーツ・体育に関する教育思想をまとめたものである。

本学の建学の精神に「若き日に汝の体軀を養え」の

一項目がある。その意図は、「青年期における身体運動の必要性和健康の維持増進」である。

松前重義は、スポーツ・体育を「身体運動を通じた全人教育」と捉え、理論だけでなく、体育実践を通じて健康増進、体力強化、運動技術の向上等を図り、将来有能な社会人として活躍するための資質を養うものと位置づけている。さらに、スポーツ・体育は単にレジャー追求の一手段とするものではなく、身体活動を通じて、社会性、協調性、礼節等を養い、加えて精神力を強化するなど幅広い人間として成長するために実践すべきものと考えている。

このように、松前重義はスポーツや体育の教育的効果を高く認め、体育学部を作り、柔道を世界に広め、学園にスポーツ・体育を広く普及・発展させるなど努力を重ねてきた。

教育改革の一つに、若者の資質向上に関する内容が存在する。松前重義の教育思想は、今日の教育に求められている内容と共通する点が多い。

## 10. 東海大学体育学部の改組改変

東海大学体育学部の佐藤は、体育学部の改組概要について VISTA の中で以下のように記している。

第2表 東海大学体育学部の改組転換 (2004.4 予定)

現行学科 (定員350)	改組後新学科 (定員350)
体育学科 (200)	体育学科 (80)
武道学科 (50)	競技スポーツ学科 (120)
社会体育学科 (100)	武道学科 (50)
	生涯スポーツ学科 (60)
	スポーツ・レジャー マネージメント学科 (40)

体育学部では第2表に示す通り、競技スポーツ学科、生涯スポーツ学科、スポーツ・レジャーマネージメント学科を新設した。

競技スポーツ学科にはアスリートコースを設け、まさにトップアスリートを育成する。種目は男子が陸上長距離、サッカー、バスケットボール、ラグビー、ハンドボール、バレーボールであり、女子はバレーボールに限定した。但し、限定種目は毎年、競技成績によって入れ替えを考慮する。

コーチ・トレーナーコースはトップアスリートを育成する指導者を養成するコースであるが、種目は特に限定していない。

生涯スポーツ学科は幼児から高齢者までの生涯スポーツの指導者を養成する学科であり、これまでの社会体

育学科の一部を継承している。

スポーツ・レジャーマネージメント学科は、生活のゆとりをどのようにコーディネートしていくのか、イベント、スポーツ行政、スポーツ施設運営等にどのように関わっていくのかなど、スポーツやレジャー全般のマネージメントが出来る人材を養成する学科である。このため、スポーツ実技のレベルは学生に問わない。

カリキュラムの特性は、アメリカやカナダなどマネージメントの分野が進んでいる国々の大学との交流を計画しており、そのためにカリキュラムの約2/3を英語で授業する。

体育学部大学院の将来構想は、現在アスリートコースとスポーツ医科学コースに加え、社会人教育のためのコースを追加したいと考えている。また、ドクターコースの設置もさらに次のステップとして念頭に置いている<sup>10)</sup>。

スポーツの愛好者やスポーツ産業は発展・拡大の方向に進んでいると考えられるが、生き残りをかけた大学教育となると体育学部そのものへの評価など問題は多い。特に「出口」対策が急務である。スポーツ愛好者に比べ求人数がそう多くないからである。

## 11. 本学学生の体力・健康・生活の実態と対策

本学学生の体力・健康の実態は次の通りである。但し、ここに記す体力とは日常生活で求められる広義の生活体力的なものではなく、本学が実施した体力テストで求めた狭義の意味である。

### (体力面)

- ① 本学では反復横跳びや垂直跳びなどのパワー低下、背筋力や握力などの筋力低下、上体反らしや立位体前屈で求められる柔軟性低下など総合的な体力低下が認められる。
- ② 近年、本学学生は強化クラブなど一部の学生を除いてスポーツをしない傾向にある。

このような現状を改善するため本学ではスポーツ参加への意識高揚と体力向上が求められている。一方、学生の中には少なくとも週1回はスポーツをしたいと希望している者も多く、スポーツ・体育活動への関心の高さも窺える。従って、このような学生に対するリーダーシップの育成等も必要であろう。

### (健康面)

- ① 本学学生の健康意識はあまり高いとは思われない。

- ② 身体に障害があり、アレルギー性疾患等で悩み、抗生物質や精神安定剤など、薬品にたよるなど虚弱な学生が少なくない。従って、このような学生に対する特別レッスンなど、実態に即した指導の工夫がみられる。

(生活・行動面)

- ① 生活面では、夜間アルバイトなどにより生活リズムを崩し、特に1限目の授業をつらく感じる学生がかなり見受けられる。
- ② 近年、仲間意識を持ったりグループで行動することを不得手とする学生が増加している。また、率先して準備や後始末が出来なかったり、礼儀や作法をわきまえない学生も存在する<sup>15)</sup>。

スポーツ活動を通じたコミュニケーションや精神面の修得は忘れてならない教育内容であると考ええる。

これらを総合的に判断し、健康で活力ある学生生活が過ごせるよう指導法を工夫する必要がある。春・秋学期の最初の授業では「スポーツ実技指導マニュアル」等に基づき、スポーツ実技履修のため参考資料1)のような実施(案)を作成している。また、スポーツ・レクチャーの概要については参考資料2)に記した。

## 12 九州東海大学における健康・体育科目の改組改変

第3表 健康・体育科目関連科目の改訂(2004年度~)

構成授業科目	科目名	単位	必選
文理融合科目	心と体 健康と生活	2	×
	スポーツと生活	2	×
スポーツ実技科目	スポーツ実技Ⅰ	2	○
	スポーツ実技Ⅱ	2	○

九州東海大学では2004年4月、改組改変に伴うカリキュラム改訂によって、健康・体育の関連科目を第3表のように変更・予定している<sup>6)</sup>。

文理融合科目の『心と体』は講義形式であり、「健康と生活」および「スポーツと生活」の二科目が当てられる(選択科目)。春・秋学期の配置は主として各々学部毎に割り当てられる(現在、工、農、応用情報の三学科)。

スポーツ実技科目の「スポーツ実技Ⅰ」は春学期、「スポーツ実技Ⅱ」は秋学期に行う。担当はいずれも

専任の体育教員のみで行う(必修科目)。

運動種目は体育施設の都合、若しくはシーズンや実技担当者等に合わせ、バスケットボール、卓球、サッカー、バドミントン、ソフトボールなどを行う。また雨天時には、筋力トレーニング、視聴覚教材によるレクチャーや補強・強化運動等を行う。

## 13 まとめ

以上、大学改革に関して我が国の動向、大学基準協会による相互評価、産業界等から見た大学評価、九州東海大学の教育方針と体育関連科目の改組改変、東海大学附属高校および公立高校の教育改革、東海大学体育学部の改組改変、松前重義の教育思想等について資料に基づき考察してきた。

その結果は、以下のようにまとめられる(項目のみ)。

- ① 大学における質の向上と、大学審査・評価  
② 学校教育法の改正

大学の自己点検・評価、認証評価機関による評価

- ③ 産業界等からの要望

人材の育成、知識の創造、産業界への還元

- ④ 九州東海大学の教育方針

- ・学内の意見交換と相互理解
- ・教職員・学生の情報共有化と大学運営の機能化
- ・建学の思想と解釈力の構築育成
- ・地域との連携と就職強化

- ⑤ 東海大学体育学部の改組改変

- ・トップアスリートを育成するアスリートコース新設
- ・生涯スポーツの指導者を育成する生涯スポーツ学科の強化
- ・スポーツ行政、スポーツ施設運営、イベント等をコーディネートするスポーツ・レジャーマネジメント学科の新設

- ⑥ 九州東海大学の体育科目の改組改変

文理融合科目	健康と生活	選択
	スポーツと生活	選択
スポーツ実技科目	スポーツ実技Ⅰ	必修
	スポーツ実技Ⅱ	必修

少子化による教育界への波紋は、大学以前に高等学校から現われ、さらに公立より私立の高等学校に早く出現する傾向にあるため、教育改革にはこれらにも注目しておく必要がある。他大学同様、本学においても受験生は年々減少の傾向にある。第三者評価に対処するためにも、本学では現場の教職員が一丸となって新学長の提案した就職や指導教員組織の重視、並びに

大学院の充実等の実現に向かって努力しなければならない。

## 参考資料

### 1) 体育実技ガイダンスの内容

- ① 松前重義のスポーツ・体育に関する教育方針伝授。
- ② 出席指導：欠席回数は2回まで考慮するが、それ以上の無断欠席は単位を与えない。但し、事故・病氣、本学を代表して出場する対外試合やコンテスト等による欠席は、体育会議を経て認めることがある（対外試合や忌引き等は事前の欠席届が必要）。
- ③ 遅刻の取り扱いは、定期試験受験心得に従い20分までは許可する（それ以後は欠席扱いとする。但し、特別な理由ありとして担当教員が認めた場合はその限りとしなない）。
- ④ 学生によるスポーツ種目（受講内容）の選択。
- ⑤ 健康上問題のある学生、特に重大な疾患のある者では担当教員でリストアップを行い事故防止につとめる（健康管理室からのリスト必要）。
- ⑥ 教育的観点より基本的にスポーツの服装は指定する。また、屋内と屋外の靴を区別するため屋内用靴の靴ひもを指定する（いずれも窓口は九州教育産業）。
- ⑦ 火の始末、くわえ煙草、貴重品の管理と盗難防止、ロッカー使用上の注意、フロアー内土足禁止等の注意を徹底する。
- ⑧ 体育館使用に関する学生課への届け出義務伝達。
- ⑨ 名簿作成、並びに原簿責任者による他学科等の履修生確認。

### 2) スポーツ・レクチャーの概略

スポーツ・レクチャーについては著書「生き生き現代健康学」の中に記しているが、その概要は以下の通りである。

体力向上には身体づくりから実践することが必要である。そのためには最低1週間に1回の継続した身体運動が求められる。特に身体適応は3ヶ月後から向上を示す傾向にあるため、一般化されている「トレーニングの原則」に沿った科学的方式を取り入れるなど工夫する。例えば、トレーニングの原則（過重負荷の原則、時間の原則、頻度の原則）等に基づき実施する。

特に、体力向上には「継続性の原則」が求められており、継続しなければすぐに元の状態へ逆もどりするので注意を要する。問題点は、短期的かつ無理な体力養成による事故やそれら原因による体調不良、やる気喪失等である。これらは運動の逆効果となりかねないので特に注意する<sup>14)</sup>。

## 参考・引用文献

- 1) 赤岩英夫，相互評価考，じゅあ NO30，大学基準協会，2003年6月，1-2頁。
- 2) 赤岩英夫，前掲書。
- 3) 板東久美子，学校教育法の一部改正による第三者評価制度の導入について，じゅあ NO30，大学基準協会，2003年3月。
- 4) 外間 寛，大学基準協会の新たな改革への動き，じゅあ NO30，大学基準協会，2003年4月。
- 5) 香取草之助，発見的教授法を目指して，Heuristics，東海大学教育開発研究所季刊ニューズレターVol6-2，2003年1月。
- 6) 九州東海大学カリキュラム改訂統括グループ編，カリキュラム改訂ガイドライン第3版，2004年，2-17頁。
- 7) 松前重義，東海大学建学史，東海大学四十周年史編纂専門委員会編，東海大学出版会，1983年11月。
- 8) 松前重義，青春に生きよう，東海大学出版会，1991年5月。
- 9) 松前義昭，新学長に聞く，VISTA 第108号，学校法人東海大学，2003年4月。
- 10) 佐藤宣践，シリーズ学部長に聞く，VISTA 第101号，学校法人東海大学，2003年4月。
- 11) 白井久也，我が昭和史，朝日新聞社，1991年5月。
- 12) 寺下栄，谷口哲也，進む大学評価(下)，VISTA 第105号，学校法人東海大学，2003年，2-3頁。
- 13) 寺下栄，谷口哲也，前掲書。
- 14) 米沢 久，生き生き現代健康学，九州東海大学体育研究室，1999年3月，173-182頁。
- 15) 米沢 久，九州東海大学学生の健康と体力の実態，九州東海大学紀要応用情報学部第2号工学部第28号，2001年3月，43-50頁。

（平成16年6月12日受付）  
（平成16年9月6日受理）